日蓮数学研究大会講演
於身延山大学

もう一つの「立教開宗」

中尾　堯

一、建長五年四月二十八日の出来事

日蓮聖人は、長期にわたる比叡山遊学を終えて、清澄山に帰った建長五年（一二五三）四月二十八日、旭が森で朝日に向かって「南無妙法蓮華経」の題目をはじめられたと伝える。日蓮宗では、日蓮聖人のこの壮挙をもって立教開宗の宣言ととらえ、今年はそれから七五〇年にあたる記念事業が進められている。ここでは、日蓮聖人のこの「立教開宗」のもつ意義について、改めて考えていきたいと思う。

日蓮聖人は、建長五年の聖なる出来事を、後々まで特に深く意義づけ語られていた。身延山に入山されて三年目の建治二年（一二七六）には、『清澄大衆中』に次のようにしたためられている。

虚空蔵菩薩の御恩を報ぜんがために、建長五年四月二十八日、安房国東条清澄寺道善房之持仏堂之南面にして、浄円房と申もの竝少々の大衆にこれをもうしはじめて、其後二十余年が間退転なく申す。

もう一つの「立教開宗」（中尾）

ここには、日蓮聖人が「虚空蔵菩薩の御恩」を強く意識されていたことと、「清澄寺道善房之持仏堂之南面」を、最初に法門を説いた祈念すべき場所として意義づけられていることに注目される。これに加えて、弘安二年（一二七九）の『聖人御難事』では、「午の時に此法門を申し始めて今に二十七年」と述べ、その時刻を建長五年四月二十八日正午のころと限定されている。

日蓮聖人の「立正開宗」について叙述された、『清澄大衆中』と『聖人御難事』の遺文によってみる、建長五年四月二十八日の聖なる出来事は、二つの重要な事実を物語っている。その一つは、「清澄寺道善房之持仏堂之南面」という場所であり、もう一つは「虚空蔵菩薩」に対する信仰である。

日蓮聖人の入滅後二百年ほど後に制作された、円明院日澄（一四四〇～一五一〇）が編集した『日蓮聖人註画讃』では、「立教開宗」についての情景を絵師に描かせ、次のような詞書を記している。

①一七日間室内に入りて出ず。満一七日、同二十八日早朝、日天に向かい、合掌して十返ばかり、はじめて自ら「南無妙法蓮華経」の七字を唱う。

②午の刻、清澄寺諸仏坊の南面に、道善房・浄円房等大衆ならびに当地地頭東条左金吾景信等を集め、念仏無限・禅天魔の法門を説く。

③宗旨建立の発軫、経王流布の濫觴也。

ここでは、①一七日の間室内にこもり、八日目の二十八日早朝、日天に向かって題目をはじめて唱えたと、まず伝える。②ついで、午の刻に諸仏坊の南面で、大衆や東条景信らを前にして法門を説いた。③これが「宗旨建立」＝「立教開宗」のはじめであるとする。当時の伝承を基としたこの伝記では、四月二十八日午前中の情景が、より具体

的に記述されていることと、午の刻に行われた説法の座に、東条景信が現れたことである。

これらの史料によって、建長五年四月二十八日の出来事として重要なことは、むろん「立教開宗」が題目の創唱によって物語られていることが第一であるが、ほかにいくつかの注目されるべき事柄がある。ここでは特に虚空蔵信仰を取り上げ、その意味するところを「開宗」と関係づけて考えてみよう。

二、虚空蔵菩薩の信仰と明星

清澄寺の本尊は、無限の知恵を得ることを祈念する虚空蔵菩薩で、修業者たちは「求聞持法」という修法をその前で行う。日蓮聖人は若年のころから、この虚空蔵菩薩に並々ならぬ信仰を捧げていた。清澄寺に当時の木像は現存しないが、その像容は座像であったと思われ、右手の掌を外に向けて右膝に垂れるという。「与願印」を結んでいる。『清澄大衆中』には、日蓮聖人が虚空蔵菩薩に信仰を捧げた一例を、次のように述べている。

東条左衛門景信が、悪人として清澄のかいし、等をかりとり、房々の法師等を所従にしなんとせしに、日蓮敵をなして領家のかたうどとなり、清澄・二間の寺、東条の方につくならば、日蓮法華経をすてんと、せいじょうの起請文をかきて、日蓮が御本尊の手にゆいつけていのりて、一年が内に両寺は東条が手をはなれ候しなり。此事は虚空蔵菩薩もいかでかすてさせ給べきか。

ここでは、東条郷地頭の東条左衛門景信が伝統的にもつアジール権を侵害するに止まらず、寺内の権限や組織にまで触手を伸ばそうとしたことが物語られている。アジール権というのは、寺社の領有する聖域を、俗権によって侵害できないという、宗教的な自治権のことを指す。日蓮聖人は、この動きに対して領家の側にたち、東条側の侵害意図

をみごとに撃退した。

このような聖と俗の深刻な抗争にあたって、日蓮聖人はみずから本尊と仰ぐ虚空蔵菩薩に、立願の儀礼を行った。それは、虚空蔵菩薩の右手に「誓状の起請文」を結い付けて、勝利を祈念することである。清澄寺の『虚空蔵菩薩』をまつる虚空蔵堂で、何日も籠もって祈願したと思われ、これは有名な「虚空蔵求聞持法」の修行を意味するものであろう。

ところで、長期間にわたり仏堂にこもって祈念するという信仰儀礼は、清澄寺において伝統的に行われてたことが注目される。このような儀礼については、『種種御振舞御書』における円智房についての記述によって、よくうかがうことができる。

円智房は、清澄の大堂にして、三カ年が間、一字三礼の法華経を我とかきたてまつりて、十巻をそらにおぼへ、五十年が間、一日一夜に二部づつ読まれしぞかし。

ここには、注目すべき二つの点が述べられている。それは、一には仏堂に籠もって祈念をこらすという「籠もり」の儀礼であり、二には法華経の写経と暗誦という修行である。これによって、当時の清澄寺では、虚空蔵菩薩に対する「虚空蔵求聞持法」と、実動的な法華経信仰という、きわめて自力的な信仰による儀礼が行われていたことがわかる。しかも、日蓮聖人はこの虚空蔵菩薩信仰にもとより深く信仰を寄せ、後にも法華経信仰の基底部にこの信仰を堅持していたのである。

ここで「虚空蔵求聞持法」といえば、弘法大師空海の『三教指帰』の記事を想起しないわけにはいかない。その冒頭には、密教修行のはじめを、格調高く謳い上げている。

ここに一の沙門あり。余に虚空蔵求聞持法の法を示す。この経に説かく、若し人、法によってこの真言一百万遍を誦すれば、即ち一切の教法の文義暗記することを得ん。ここに大聖の誠言を信じて、飛焔を鑽燧に望む。阿州大滝嶽に登り攀じ、土州室戸岬に勤念す。

虚空蔵求聞持法が知恵明瞭を祈る真言の行法であることは、この文によってよく窺えるところである。徳島県阿南市の大竜寺には、虚空蔵求聞持法を行う求聞持堂があり、扉や窓を閉ざして暗室にできる構造になっている。ここでは、暗闇の中で、虚空蔵菩薩の真言を一日一万遍称え、百日で百万遍の真言を成就するという修行が行われる。〔現在、大竜寺の求聞持堂で行われている虚空蔵求聞持法は、五十日で百万遍の真言を成就する〕

このような構造をもつ堂は、清澄寺の旭が森脇にあり、「錬行場」と呼ばれている。これは、清澄寺において虚空蔵求聞持法が行われていた求聞持堂があったことを、遺構として伝えるものであろう。

清澄寺での日蓮聖人は、このような虚空蔵求聞持法を、「日蓮が本尊」と仰ぐ虚空蔵菩薩の木像前で修していたことは間違いないであろう。しかも、後年の身延期に至るまで、法華経信仰の基底に虚空蔵菩薩の信仰を懐いていたことは確実である。

この虚空蔵求聞持法は、明星信仰と深い関係がある。実際、『日蓮聖人註画讃』では、虚空蔵菩薩信仰が明星信仰によって物語られている。特に清澄山の山中の場面では、「明星池」と注記された井戸があり、その上に高床式の堂が構築されている様子が描かれている。そのそばで「日本第一の智者たらん」と祈る日蓮聖人の視線の向こうには、明星が明るく輝いて光を放つ。

日蓮聖人の遺文を見ると、建長五年四月二十八日の立教開宗から後の叙述として明星に関する奇跡が数多く語られ

もう一つの「立教開宗」（中尾）

もう一つの「立教開宗」（中尾）

ている。それを列挙しよう。

○二月五日、東方に明星二つ竝び出る。其の中間は三寸許りと云々。此の大難は、日本に先代未有歟。（『法華取要抄』）

○明星竝び出るは、太子と太子の諍論也。（『法華取要抄』）

○天より明星の如なる大星下りて、前の梅の木にかかりてありしかば、もの、ふとも皆ゑんよりとびおり、或は庭にひれふし、或は家のうしろへにげぬ。（『種種御振舞御書』）

○生身の虚空蔵菩薩より、大智恵を給りし事ありき。日本第一の智者となし給へと申せし事を不便とや思し食しけん、明星の如くなる大宝珠を給て、右の袖にうけとり候し故に、一切経をみ候しかば、八宗竝びに一切経の勝劣、粗これを知ぬ。（『清澄大衆中』）

ここでは、虚空蔵菩薩とかかわる明星信仰について、二点が示されている。その一は、「明星二つ竝び出る」「大星下りて前の梅の木にかかる」というような奇異な現象が、「太子と太子の諍論」というような、恐るべき未来の運命を予見させることである。その二は、「明星の如くなる大宝珠」が授けられることによって、大智恵が与えられることである。日蓮聖人は、法華経をはじめとする諸経典の教えをもとに、『立正安国論』など預言性の濃い論説を展開した。その宗教を考えるとき、虚空蔵菩薩信仰は法華経信仰の基底にある信仰として、十分に納得いくものであろう。

三、虚空蔵菩薩信仰と山林修行

弘法大師空海の求聞持法にみる虚空蔵菩薩信仰は、四国の縁辺の山岳をたどる密教の修行に展開して、後世の四国遍路修行に連なっていく。それは、『三教指帰』にみる「阿州大竜嶽に登り攀じ、土州室戸崎に勤念す」という文言が物語るように、深い山林と嶮しい海岸を舞台とする、山林修行を意味するものである。

虚空蔵菩薩を本尊とする清澄寺は、眼下に太平洋の黒潮をのぞむ清澄山の山中にあり、標高のわりには山容が大きく豊かに繁茂して、山林修行には最適の環境にある。この寺には、天台宗や真言密教の基本的な典籍が収められ、密教の修行道場として訪れる者も多かった。早稲田大学に所蔵されている、院主阿闍梨寂澄の「如法経奉納状」によると、回国の行者が「六十六部如法経一部」をここに奉納したことが分かる。清澄寺は、全国的な規模をもつ納経の霊場でもあった。

このような密教の山林修行を行った僧に、若年の時期の修行が比較的明かな、俊乗房重源がいる。源平合戦の兵火にかかって焼失した東大寺の大伽藍を、勧進活動によって見事に復興した僧である。重源は「重源願文」のなかで、その密教修行の出発点について、次のように述懐している。

○仏子、早く二恩の懐を出て、久しく一実の道を求む。初めは醍醐に住し、後には高野に棲む。霊地・名山処々、春草纔に孤庵を結び、巡礼修行年々、秋月を只親友となす。

○生年十七歳の時、四国の辺を修行す。

○生年十九、初めて大峰（修験）を修行す。

○如法経（法華経）を書写す。

○信濃国は善光寺に参詣す。

もう一つの「立教開宗」（中尾）

もう一つの「立教開宗」（中尾）

○満百万遍（念仏）

○七日七夜不断念仏を勤修す。

このように列記すると、若年時における重源の修行体験と、日蓮聖人のそれとは、重なり合うところが多いことに気づく。清澄山中の虚空蔵堂に本拠を置いて、念仏や真言を称えながら山中を修行して回り、付近の霊場にも足を運んで祈念するというのが、その実像であった。

清澄山中におけるこのような修行体験は、求聞持法の儀礼を見事に継承しながら、後々まで日蓮聖人の行動様式に影響を与える。建治二年（一二七六）三月の『光日房御書』には、自らの祈りが叶ったという佐渡での体験を叙述している。それは、天照大神と正八幡宮が、日蓮を守護し通すことができなかったという「この罪おそろしとおぼさば、いそぎいそぎ本国へかへし給へと、高き山にのぼりて大音声をはなちてさけびしかば」とある。また、『富城入道殿御返事』には、「尼御前御寿命長遠の由、天に申候ぞ。その故御物語り候へ」とある。高き山で大空に向かって叫び、あるいは天に向かって祈りを捧げるという儀礼は、求聞持法を彷彿とさせるではないか。

清澄山中の清澄寺における、若き日の日蓮聖人は、念仏の信仰者で道善房を師と仰ぎながら、虚空蔵菩薩の前で求聞持法を修し、深く山中に分け入って山林修行に励んだ。その信仰儀礼の様式は、後々まで日蓮聖人の信仰行為に深い影響を残した。

四、山林修行者の特質

日蓮聖人の信仰と思想には、若年の頃に清澄寺で体験した、山林を舞台とする密教修行にもとずく虚空蔵信仰が、

その基底にはっきりと横たわり、明星信仰として表出していることは確認できた。では、日蓮聖人もその一群に属した山林修行者について、そのイメージを描いてみよう。

まず、世俗を離れて深い山林に籠もり、「離俗」・「脱俗」・「超俗」などの言葉が適切なように、独特の生活スタイルをとっている。また、霊場に参籠して、神秘的な難行・苦行を続けて、身につけた霊力をもって人々の祈願に応える。このような生活態度であったから、頑健な体力に恵まれ、持久力に優れていた。なかでも、高山を上り下りする強い脚力に特徴があった。

次に、山林修行者の信仰行為における特性を見ると、きわめて具象的な判断と意味付を持ち前としていた。「五種法師」とよばれる、経文の受持・読・誦・解説・書写の修行は、仏教に通有なものではあるが、修行者はこれを満遍なく実行することに心をくだいたようである。

山中では、暗誦した経文を声量豊かに唱え、聖者としての神秘的な雰囲気に包まれた姿勢を崩さない。人々に向かっては、物事の由来や未来の預言を、経典や現象にもとづいて説き明かす。それは、日蓮聖人が「過去の事、未来の事を申しあてて候が、まことの法華経にては候なり」と、『清澄大衆中』のなかで述べている通りである。

山林修行者が営む儀礼や行動によって、多面的に表出される思想についても、一つの傾向があるように思われる。①体験的に獲得した宇宙観を行動的に描き上げる。②万物の存在を肯定的に捉える。③事物の意味付けと抽象化に優れる。④献身的な営みを指向する。概観的にまとめると、このようにきわめて具像的な傾向が強い。教義体系を打ち立てて理念的に信仰を進めるというのではなく、いわば行動のなかに思想を表出させる、実際的な傾向が支配的である。このような僧が標語として掲げるのが「利生」、すなわち「利益衆生」という具体的な目標であった。

もう一つの「立教開宗」（中尾）

先にあげた重源のような山林修行者は、修行の場であった山林をいつしか離れて、巷間に交わって衆生の救済に挺身するようになる。このような例は、平安時代の中期から鎌倉時代にかけてまことに多く、時代の一つの潮流をなしていた。清澄山中では山林修行の深い体験をもつ日蓮聖人も、このような行動様式と無縁ではなかった。

五、もう一つの立教開宗

建長五年四月二十八日は、日蓮聖人の立教開宗の日として、重く意義づけられている。それは、「南無妙法蓮華経」とはじめて唱え、法華経の伝道を表明した出来事によって語られる。従来、比叡山遊学の旅から清澄寺に帰るという、日蓮聖人の軌跡を前提として、それはきわめて主知的な営みと理解されてきた。もちろん、その理解は十分に評価されなくてはならない。

しかし一方で、日蓮聖人の山林修行の体験と、後々までのその深い影響を考えるとき、「立教開宗」という出来事を、単純に法華経の信仰唯一の意義に限定して理解するわけにはいかないであろう。それは、かつて多くの山林修行者が辿った道と同様に、みずから山林修行という自行の信仰世界から離脱して、俗世に向かっての伝道を決意したことを意味するはずである。

それは、多くの危険をかえりみず、身を挺して行ってきた山林修行と同様に、さまざまな苦難を前提とした伝道活動を予見するものであった。日蓮聖人の、行動性を標榜する「自行」から「化他」への大きな転換を示すというのが、題目の創唱と法華経信仰の鼓吹で語られる「立教開宗」の、「もう一つの立教開宗」の意義といえるであろう。